AiGO ほっかいどう 190

[ほっかいどう 愛護]発行／2021年　6月　発行所／札幌市中央区北2条西7丁目かでる2･7 4F TEL.（011）271-0228
発行者／北海道知的障がい福祉協会　会長 遠藤 光博

2021.06
CONTENTS

2P. 令和3年度に向けて
3P. 誌面でオンステージ♪みんなあーとステージ部門より
4P. 令和3年度各委員会活動計画
6P. コロナ禍における
北･北海道知的障がい福祉協会の取り組みについて
7P. ご長寿バンザイ
8P. 本の紹介
8P. 手しごと探検隊!「たのしいどう　パン工房春いろ」

令和3年度に向けて

一般社団法人北海道知的障がい福祉協会　会長　遠藤　光博

コロナウイルス感染症の集団発生のニュースが報道されたのが2019年の晩秋から初冬、その頃はまだ対岸の火事程度の受け止めでしかなく、数年前のサーズの流行程度で収まるだろうとの思いでどこかしら他人事のような感じがしていたのが、年が明けての横浜港に寄港したクルーズ船ダイアモンド・プリンセス号でのクラスター発生のころから、ただ事ではない状況である、との認識に変わりました。諸外国では都市封鎖などが矢継ぎ早に実施され、わが国でも緊急事態宣言の発出やそれに伴う全国的な学校休業や旅行自粛、テレワークの実施など、それまでの日常がまるで様変わりし、「新しい日常」などという言葉が飛び交い、それが長期化するなど、私だけでなく多くの人が予想もしていなかったのではないでしょうか。

令和２年度はとにもかくにもコロナ、コロナであっという間に１年間が過ぎてしまい、当協会の活動も大幅に変更や制限がなされることになったのは、皆様ご承知の通りです。また、加盟事業所においても感染防止対策を講じていたにもかかわらず、数か所の事業所で大規模なクラスターが発生し、発生事業所の属する地方会を中心に支援者を発生事業所に派遣するなど、感染防止物品の提供なども含め皆様にご協力いただきました。おかげさまでこの原稿を書いている現在は（５月１日）発生の報告は受けておりません。ご協力ご支援いただいたすべての皆様に感謝とお礼を申し上げます。

令和３年５月の今日現在も、ウイルスの変異株などの影響か、東京や大阪に３度目の緊急事態宣言がなされ、第４波の感染拡大（パンデミック）と、いまだ減少、収束の見えない状況で、今はただただ、感染防止策を徹底しながら１日も早い終息を祈るばかりです。

そうした中でも昨年度を振り返ってみますと、会員の皆様のご協力もあり、年度後半には施設長研修もオンラインで開催することができ、その席では当協会の橘顧問（元会長）が旭日小綬章、尾形永造元理事が北海道善行賞、小林理事が愛護福祉賞、山本家弘元理事が日本知的障害者福祉協会会長表彰を受けられ、会員の皆様にご紹介させていただいたところです。

一方で、当協会加盟の事業所内での支援者による利用者暴行事件が発生し、支援者複数人が逮捕、起訴され、有罪となる事案も報道されました。また非会員事業所ではありますが、知的障がい関係の事業所でも虐待事案の報道がなされ、改めて利用者のみならず障がいのある方々の人権擁護への取り組みを、会員一丸となって進めていく責務を痛感させられました。

相模原市の事件でも多くの命が奪われ、障がいのある方々の支援に対する思いを新たにしたはずなのに、極めて遺憾であり残念なことと言わざるを得ません。令和３年度のみならず今後に向けて、「人権侵害ゼロへの誓い」を、１万４千余名の会員事業所職員すべてが強く意識、実践していく必要があります。

さて話は変わりますが、令和３年度は障害福祉関係の報酬改定の年でした。年間予算並みのコロナ対策の補正予算が組まれ、通常であれば財源の確保などから報酬減額も予想される中、関係の皆様のご尽力でマイナス改定にならなかったことに胸をなでおろしているところですが、私はこのこともコロナと多少関連があるように思っています。新型コロナウイルス感染症のパンデミックでクローズアップされたのが、「エッセンシャルワーカー」と呼ばれる職業の人たちです。医師や看護師、救急隊員やごみ収集の人たち、千葉県の「北総育成園」や札幌市内の高齢者施設でのクラスターでは、介護職員や障がい者支援職員などがマスコミに思わぬ形で取り上げられ、改めて、こうした人たちの社会生活の中での大切さが社会に周知されることにつながったと思います。私たちの世界で人材の確保の厳しさが叫ばれるようになって久しいですが、改めて人材の育成や確保に取り組んでいくことが求められていますし、社会の中でもこうした職業の大切さ、必要性の認識が広がり始めている中での、予算対応という側面もあるように感じています。変異株の拡大や、一方でワクチン接種の先行国では、先の見通しがうっすらと明るくなりつつあるなどの報道もあります。過剰な自粛などを求めるのではなく、「正しく怖がる」ことが、社会にも私たち障がい者支援の場にも求められているのではないでしょうか。

いずれにしても、まだまだ不透明感が強いコロナ禍の令和３年度のスタートですが、改めて正しい情報を集め、正しく恐れ、適切な感染防止に努めながら、日常を取り戻すための地道な取り組みが求められます。今年度も皆様のご指導、ご協力を心からお願い申し上げます。

誌面でオンステージ♪

「みんなあーとステージ部門」より

利用者の皆さんが楽しみにしている「みんなあーと」ですが、昨年は残念ながら中止となってしまいました。
今年は展示部門のみ開催予定ですが、いつの日かステージで発表できる日が来ることを願って今回は誌面でのステージ発表を企画しました。

「しりべし学園成人寮和太鼓倶楽部」（しりべし学園成人寮）

しりべし学園成人寮は、「サンデー九」とも縁があり、実際に坂本九さんが来園したこともある施設です。
和太鼓倶楽部は、国際障がい者年を契機に発足しました。過去には青函トンネルの開通式などのイベントに出演もありましたが、現在は一部メンバーを入れ替えながら活動を続けています。
メンバー構成は、しりべし学園成人寮の入所者と職員、グループホームや地域で暮らしている方の6名です。
主な活動内容としては、毎年6月末に施設内で行い、町内外の方々が集まる「ふれあいまつり」や、後志地方会の本人部会「希望の会」主催の文化祭、11月には町の文化祭での演奏が定例化しておりました。
しかし、昨年は新型コロナウイルスの影響で、それらのイベントは全て中止となってしまいました。そのような中で、私たちメンバーも「今年は1回も叩かないのかな」と思っていたのですが、町内の有志による花火大会が行われることになり、和太鼓倶楽部にもお声がけを頂きました。落ち着いているとはいえ収束していない中、マスク着用での太鼓演奏であり、不安もありましたが演奏機会を頂いたことに感謝し、参加を決めました。
みんなあーとでは、3年前から2年連続で出場させて頂き、いずれも入賞には至りませんでしたが、ポスターに私たちの写真が使われていて、大変驚き、嬉しかったのを記憶しております。
メンバー全員、みんなあーとに参加した際は楽しかったと話していたので、次の機会があればまた是非とも参加したいと思っています。

「Three Peace」（三和荘）

私たち「Three　Peace」は、手話を使った合唱を行ってきました。みんなあーとのステージ発表に向けて練習を始めるのが、毎年の恒例でした。しかし、新型コロナウィルスの世界的流行により、この毎年の恒例行事も難しくなってしまいました。昨年度は、この未知なるウイルスとの戦いの年だったのではないでしょうか。それは三和荘も例外ではありませんでした。このウイルスの全貌がまだまだ分からなかった昨年度は、合唱ができる状況ではなく、そのような心の余裕も無かったと思います。しかし、「Three Peace」のメンバーからは、「今年は活動をしないのか？やりたい！」という声が多く聞こえました。その前向きな声に職員の方が勇気付けられたように思います。この状況の中でも何か出来る事はないか模索し、試しています。全員が集まっての合唱練習も感染対策から考えると難しいので、少人数に分けて短時間で練習をすることにしました。また、昨年度は施設にWi-Fiが完備されたので、パソコンを使いリモートで練習を行ってみたりもしました。試行錯誤をしていますが、離れた場所での練習だと中々息が合わず難しいです。今まで通りの練習ができずもどかしい思いをしているメンバーも多いとは思いますが、皆さん積極的に取り組んでいます。今年度もみんなあーとのステージ部門は中止とのことで残念ではありますが、参加される皆さまの素晴らしい発表がまた見られる日が来ることをThree Peace一同心より願っております。

令和３年度各委員会の活動計画について

昨年はコロナ禍の影響で各委員会の活動がほぼ中止か縮小となってしまいました。現在も収束の兆しが見えない厳しい状況ですが各委員長から今年度の活動計画について伺いました。

政策委員会

委員長　大垣　勲男

政策委員会の令和3年度の主たる活動計画としては2点です。ひとつ目は昨年度コロナ禍の影響で中止となりました「北海道との行政懇談会」を今年度は7月27日（火）14時からオンライン形態で行います。各地方会・各部会から北海道への提言・要望を募り北海道と意見交換を深めます。今年度は報酬改定もありましたので、道を通じて厚生労働省への要望もあるかと思います。各会員事業所に提言・要望の依頼文書が届いていると思いますので各地方会や各部会を通して提出して頂きたいと思います。ふたつ目は、「全道知的障がい児者施設・事業実態調査報告書」の作成です。日本知的障害者福祉協会が行う全国調査の北海道版切り出し調査となっていますので、全国・全道の状況や実態と自分の事業所を比較できる貴重な資料を提供したいと思います。その昔、砂漠や大草原の旅人は北極星の方角や高さを確認することによって、己の進路を決めていたそうです。

権利擁護委員会

委員長　畠山　　信

コロナ禍により委員会として十分な事業推進ができない中、昨年度は道内において権利侵害事案が幾つも報告され、改めて研修や啓発、啓蒙などの重要性を感じています。感染が収まりませんが、今年度も権利擁護セミナーを開催し、昨年は諦めた指導者養成研修を２日間で開催予定。オンブズマン研修については年明けを目途に札幌で実施したい考えですが、状況によってはＷＥＢ開催とします。

権利侵害は支援の現場で起きます。現場の職員、指導的職員、そして管理者が人権意識を確実に持つ必要があります。道の委員会としての取組みと同様に重要なのはより現場に近い各地方会の権利擁護委員会の取組みだと思います。それらがうまく連動して機能すれば北海道全体の権利擁護の底上げが図られると思います。令和３年度４年度でその基礎を作って行ければと思っています。

運営研究委員会

委員長　白幡　　浩

令和２年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、多くの事業が中止されました。

令和３年度も北海道は、感染状況・医療提供体制ともに危機的状況にあり、感染拡大防止措置の徹底を行っていますが、いまだ終息が見えません。このような状況での研修会等の実施について、安全に開催できる方策を運営研究委員会で検討しています。

まず、６月に開催される「全道施設長セミナー」は、参加していただく会員の皆様の安全を考慮し、オンラインでのセミナー開催といたしました。

今後の研修事業は、「全道施設長セミナー」を参考にしながら、開催時期・開催方法（二つの研修会を合同で行うなど）・研修内容の検討を重ね、より安全に開催できる研修事業を実施したいと考えています。

執筆時現在、「緊急事態宣言」が発出されている状況でありますので、計画した研修会の延期や中止などの対応も考えられますが、皆さまにはご理解いただきますようお願いいたします。

加齢化支援検討委員会

委員長　祐川　暢生

加齢化支援検討委員会は、これまで年度に一度、知的障がい者の高齢化とその支援に関する研修会を開催し、また高齢化の実態調査、介護保険サービスの併給・移行調査などを実施してきました。令和2年度は、利用者の看取り、ターミナルケアに関する調査を予定していたのですが、私の法人も含め、コロナ禍への対応に追われて手をつけることができませんでした。研修会の開催も断念しました。

令和3年度も研修会は実現できそうにありません。日本知的障害者福祉協会の障害者支援施設部会全国大会の担当が北海道地区であり、現在リモート開催に向けて、そこに労力を注ぎ込む必要があるからです。しかし看取り、ターミナルケアに関する調査はインターネットを通して年度内に実施し、道協会の入所施設およびグループホームが利用者の人生の最終場面をどのように支えているのか、その実態をご報告できればと考えています。

危機管理委員会

委員長　三戸部　隆

皆様にはコロナ禍の中、利用者の方々の日常を維持すべく日々奮闘されていることに対して心から敬意を表したいと思います。

協会の活動につきましても、このパンデミックともいうべき新型コロナウイルス感染症の拡大により、多くの取り組みが制限されている現状にあります。

本委員会の活動につきましては、こうした状況が早期に終息することは考えにくいことから、今年度は、オンラインによる研修会の開催と、改めての災害対応備蓄用品の調査、加えて感染症対応備蓄用品についても実態の把握が出来ればと考えております。

災害は「私個人」に来るのではなく、国や民族、人種を超えて「私たち」に来るのだと聞いたことがあります。

私たち協会加盟の事業所の皆さんが力を合わせて取り組んでゆかなければならないこととして、今年度の活動についてのご理解とご協力を宜しくお願いいたします。

支援研究委員会

委員長　生山　良彦

昨年、11月頃より動き出した支援研究委員会ですが、時を同じくして新型コロナの感染が拡大、福祉施設でのクラスターが身近に迫り、「次は自分の所かも…」という不安と隣り合わせの中、支援研事業が出来るのか、やっていいのだろうか？と迷いながら委員一同、手探りで話し合いを進めてきました。この状況でも支援研の活動が出来るのは、コロナに罹らないように頑張っている利用者さんや職員のお陰で、本当に有難いことです。

まだまだ見通しは立ちませんが、全道各地で同じくコロナと闘っている皆様へ、支援研で出来ることはないかとオンラインでの支援員向け研修、利用者向け行事を計画中です。全道パークゴルフ大会は開催を待ち詫びている選手の皆様の想いに応えるべく、感染対策を十分に講じての計画を進めています。支援研の伝統を胸に、一丸となって事業開催に向けて尽力していきたいと思います。何卒ご理解、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

第9回障害者支援施設部会全国大会北海道大会開催について

実行委員長　祐川　暢生

令和2年11月に開催のはずだった当大会は、新型コロナ感染症流行のために令和3年度に延期となりました。例年、参加者が500～600人の規模になる大会を、現在の状況では、札幌市内の会場で開催することは到底できません。実行委員会で議論を重ね、Web開催の方式をとることとしました。

Web開催はどうしても臨場感が希薄になってしまうかもしれませんが、他方では、事前収録した講演プログラムを一定期間Web上で視聴することができ、しかも参加者が自分で視聴のタイミングを選ぶことができるメリットがあります。私たちにはノウハウが乏しいですが、専門業者の手助けを受けながら、大会を成功させたいと考えています。大会の視聴期間は令和3年11月15日～11月28日までの14日間を予定しています。

大会テーマは「権利擁護の視点から支援の質を考える～コロナ禍において重度高齢化が進む障害者支援施設に問われるものは～」です。厚労省公表の障がい者虐待の状況（平成30年度）によると、障害者福祉施設従事者等によって虐待が認められた障がい者数は777人、そのうちの75%を知的障がい者が占めて3障害のなかでもっとも高い割合となっています。そして新聞やTVニュースでは障害者支援施設における虐待の事件がいくつも報道されています。

北海道大会では、虐待を許さない入所施設のあり方、支援の質の向上等について考えるのはもちろんですが、多様な主体が共に生きるとはどういうことなのか、人が人を支えるとはどういうことなのか、そうした人権、権利を考え、理解するための土台にまで問題を掘り下げて学びを深めたいと考えています。これは、新型コロナで不安と疲弊感が募り、社会の矛盾や不安の矛先が「社会的弱者」とされる方々に差別や排除として向けられやすい状況を考えると、私たちがまさにいま問うべきテーマだ、と言えるのではないでしょうか。

基調講演には、『こんな夜更けにバナナかよ』、『なぜ人と人は支え合うのか』の著者であるノンフィクション作家の渡辺一史さん、シンポジウムには多文化共生政策を研究されている北海道教育大学の古地順一郎さん、入所施設の施設長であると同時に障がい当事者の親としての立場から四国香川県、ウインドヒルの松原正子さん、そして日本知的障害者福祉協会障害者支援施設部会長である榎本博文さんを迎えることとしています。

道協会会員施設から複数名ずつの参加を、と思っております。どうぞよろしくお願い致します。

みんな
がんばってます!

コロナ禍における
北・北海道知的障がい福祉協会の取り組みについて

北・北海道知的障がい福祉協会会長　畠山　信

世界中が新型コロナウイルスに脅かされ、右往左往した一年。それは、私たちの日々の暮らしにも大きな影響を及ぼし、様々な面で混乱と停滞を招きました。施設・事業所を利用される方々が張り合いを持って、心豊かに生きられるよう願って実施してきた各種事業もその殆どが中止を余儀なくされた年でした。

私たち道北の協会でも当初から事業の実施をどうしようか悩み続けました。ウイルス感染への対応は不安だらけで、あらゆるものに中止や自粛が要請される中、「どうしよう」にただ時間を取られました。でも、とにかくやれる方法はないかと話合いをしているうち、無理だ・できない…ではなく、「どんな工夫をしたらできるか。どんなことなら可能かを考えていこう」が早い段階で合言葉になり、その後の事業の推進につながりました。

事業所説明会

令和２年度実施した事業のうち、外部関係者と行ったのは、特別支援学校の生徒と保護者対象の『事業所説明会』、専門学校の学生対象の『職場ガイダンス』。何れも室内での開催ですが、広い場所の確保。消毒と換気の徹底。主催者側も含めた来場者全員の事前からの健康管理の徹底等で準備を進めました。参考になる対処方法を調べ、対面用のアクリル板を加盟事業所に製作依頼。参加を時間予約制でお願いする等、手探りでしたがほぼ完璧な感染対策の下で実施できたと考えています。

事業所説明会

次に職員対象の研修会は、予定していた５つのうち４つの研修会を開催。会場に集まってという方法は無理なので、全てWEB形式で行ないました。全職員対象の『職員研修会』は意思決定支援をテーマに60名が参加。新任職員研修会37名が参加で、初めてZOOMでのグループワークも行うことができました。『権利擁護研修会』では52名が参加し権利擁護と虐待防止法について学び直し、年度末には支援研の総括を兼ねた研修会も実施して、グループワークで意見交換も行いました。

ただ、利用者の皆さんが毎年と～っても楽しみにしているソフトボール、パークゴルフ、卓球の各大会、スポーツ交流会、「ぴあすてーじ」（「みんなあーと」ステージの道北版）は中止せざるを得ませんでした。皆さんが一か所に集まり、楽しい交流と共に心と体を解放して頂くのも目的の一つでもありますが、どうしても感染への懸念を払拭できる方法が見つかりませんでした。「ぴあすてーじ」については各施設をリモートでつないでパフォーマンスを披露しあえないか等時間をかけ検討しましたが、課題が多く断念。また、企画した利用者のWEB座談会も時間がなくなり、それらは次年度への持ち越しとなりました。

専門学校での職場ガイダンス

研修事業を中心となって企画・実施したのは支援研の皆さん。ただ誰もが知識も経験もなく手探りでしたし、WEBでの検討会議はなかなか深まらないし進みません。色んな苦労がありましたが頑張ってくれました。「従来と同じ方法で考えたら『無理』で終わり。やれる方法を考える。やれる範囲で最大限のことを考えてみよう」の合言葉の下、迷走しながら何度も慣れないWEB会議の画面に向かい、個別の打合せを繰り返したことでコロナ禍にあっても可能な範囲で最大限の事業をやり遂げられたと思います。WEBでの研修会の進め方、グループワーク、東京の講師を繋いでの生配信など初めてのことばかり、しかも一度も集まれない中で頑張った支援研の皆さんは素敵でした。詳細は、3年度終了後発行予定の『北のあゆみ』（道北地方会事業報告集）をじっくり読んでください。

コロナを取り巻く状況は好転しませんが、利用者の皆さんが楽しみにしている事を一つでも二つでも実施できないか検討を続けます。他の地方会でも工夫しながら事業を展開していると思います。コロナの中にあってもみんなが明るく過ごせるよう、情報交換しながら、柔軟に前向きに一緒に歩みましょうネ！

ご長寿バンザイ

全道各地のご長寿サンのほっこりな毎日をお届けします。
うちの「ご長寿さん」を紹介したい!という方、ご応募お待ちしています。

歳をとっても楽しく

コミュニティライフこの実

共同生活援助事業所「コミュニティライフこの実」には、男性41名、女性26名、35歳から75歳で平均年齢は54歳の方々が利用されています。その中で今回ご紹介するのは、遠藤俊己さん（70歳）と藤原広志さん（71歳）です。

遠藤俊己さんは18歳から30年間一般就労されました。この経験もあり、今は顔役としてホームの共に暮らす若い利用者の手本となっています。演歌が大好きでカラオケではいつも渋い歌声を皆さんに披露しています。また、野球が大好きで早くドームに応援に行きたいと言いながらテレビで日ハム戦を楽しんでいらっしゃいます。

藤原広志さんは責任感の強い方で、日中活動で公園の草刈りや養鶏の主力として頑張ってこられました。現在は、ホームの情報通として、他の利用者の様子やニュースでの出来事、消防車や救急車が通った話など皆さんに知らせてくれます。

高齢化していく利用者の方々を支えるため令和元年12月に「日中サービス支援型」のホームを立ち上げました。これからも地域の中で「一人ひとりが大切にされ、その長い生涯が支えられること」という理念に基づき支援していきます。

元気一杯　御年96歳

侑愛荘

侑愛荘は道南北斗市にあります高齢期の方を中心とした入所施設です。利用されている方達の平均年齢は約71歳で、47歳から96歳の方達が暮らしています。

ご紹介するのは侑愛荘最高齢で大正14年生まれの御年96歳、大森志みさんです。丑年生まれで、なんと今年は8回目の年女となります。高齢の方が多く暮らす侑愛荘でも大正生まれの方は大森さんただ一人なのですが、元気そのもので、ほとんどの身の回りの事を自分で行おうとするその気力はまだまだ衰えていません！

特に食べる事への意欲はとても旺盛で、食事の時間を毎日とても楽しみにされており、食べる事の大切さを日々職員も考えさせられます。好物はおしるこやビスケットで、毎日職員に大きな声で、「まだかー」と声を掛けています。

また、最も凄いと感じる事は、担当職員の名前をしっかりと憶えており、その中で職員のお子さんの事を気にかけたりする様子もあり、そういった関わりが職員の活力にも繋がっているのではないかと感じます。

明日も大森さんの声が元気にデイルーム一杯に響きますように！

本の紹介

世間とズレちゃうのはしょうがない

出版社：PHP研究所

ISBN : 978-4569843186

2021年のGW。２年連続、行動自粛のGW。幸いにも桜の名所が近所にあり、コロナ禍のニューノーマルとして、「ドライブスルー花見」を試みる。花見も良かったが大半は自宅で過ごす。晴耕雨読どころか、「晴読雨読」の日々の中、自宅の本山（ほんやま）の標高を下げるために中腹から、山を崩さないように、そっと一冊を取り出してみる。

世間とズレることにフォーカスを当て、筆者の二人が対談形式で話を展開している。養老孟司という名前を目にすると、小難しそうにも思えるが、伊集院光の会話の咀嚼力で堅苦しくなく読み進めることができる。

私も確実にズレている自覚がある。それは「左利き」。父からの遺伝で左利きなのだが、書くことだけ右手に矯正され、「右利き風左利き」が完成する。仕事中に左利きを意識させる事はない。左利きが使いづらい自動改札機や固定電話も、右利き同様に使えるが、右利き風左利きが主流でなく、ズレている事は十分に理解している。

書中に「錦の袈裟」という噺が出てくる。そこに出てくるベタな落語の主人公「与太郎」。噺の中では最重要人物なのだが、世間からは少しズレた人なのである。この与太郎を仲間に入れるか否かで「場が持つ」というぼんやりした理由で仲間に入れる。初見ではよく分からなかった、場が持つというのは、「社会の寛容さ」の事だろう。私の経験では与太郎タイプの的外れな言動は思考の反芻を促してくれる。

世間とか人間という言葉は、「間」が入ることでズレを和らげているのと考える。定規で引いた線では書けない「揺らぎ」の部分をズレとも言うが、「その人らしさ」と表することが「間」の部分ではないだろうか。「間」は、ゆとりであるから、それを詰めすぎず、広げすぎずにいることが「個」を尊重し、調和の取れた社会となるのだろう。

コロナ対策でソーシャルディスタンスを取る事は、感染防止の観点だけで無く、現代社会の「間」の詰めすぎへの警告と考えても面白い。

（K）

手しごと探検隊！

たのしいどうパン工房　春いろ
「手作りロールケーキ」

たのしいどうパン工房「春いろ」では、栗山町産の新鮮な卵を使用したパンの他に、卵の美味しさや魅力を活かせる商品として、「ロールケーキ」を販売しております。ロールケーキは、製造後すぐに冷凍することで鮮度を保ち、しっとり食感をそのまま、お客様のもとへお届け致します。事業所でのイベント、贈り物等としてもご利用頂けます。全国の様々な事業所からも沢山のご注文頂いております。心を込めて作っておりますので是非ご賞味下さい。なお、8種類の味（プレーン、ココア、抹茶、苺、桃、オレンジ、北海道ミルク、米粉）を、1カット～1本まで注文に応じて製造しており、価格や用途に合わせてご相談にも応じます。お気軽にお問合せください。春いろ一同、お待ちしております！

製造元:社会福祉法人空知の風　たのしいどう
価　格:1カット190円～250円、1本1,300～2,000円
連絡先:TEL　0126−24−6675　FAX　0126−24−6711

編集会議

最近はサウナブームであり、私も流行に乗った訳ではないが週に一度は近所にある銭湯のサウナ室で汗を流す。コロナ渦のため手指消毒はもちろん、サウナベンチはソーシャルディスタンスが保たれている。脱衣場では裸にマスク姿の方がおり、何を守りたいのか一瞬考えてしまうが大切な予防策である。浴室の入口には「黙浴」の二文字が掲示してあるが、サウナ室では常連さん同士の世間話が尽きない。地域の情報からプロ野球や大相撲、政治や経済などスポーツ解説者か政治評論家のようであるがコミュニティが存在している。そんな世間話に耳を傾けながら、熱さに耐えた後に水風呂に飛び込む。これを3セットぐらい繰り返すと「ととのう」状態になり、何とも言えない爽快感を全身で感じることができる（血圧が高めの方はご注意ください）。

4月のある休日、早めに夕食を済ませて銭湯に出掛けようをしていると中学3年と小学6年の息子も一緒に行くとのこと。歳頃のせいか最近は誘っても「行かない」と断られるのだが、よっぽど暇を持て余していたのか一緒に行くことにした。せっかくなので銭湯ではなく、街の高台にある温泉（天然温泉ではないが地元では有名な昭和レトロ温泉）へ向かった。この温泉には小さなプールや滑り台があり、子どもがまだ幼い頃に度々訪れていたが成長とともに遠ざかっていた。久しぶりの滑り台プールに飛び込みはしゃぐ我が子。もちろんサウナ室にも入ったが子どもたちは熱さに耐えられずにいた。露天風呂からは夜景を眺めながら入浴できる。地元でありながらちょっとした旅行気分となり、学校や部活、将来のことなど親子の会話が弾んだ。帰りのコンビニで私はビール、子どもは炭酸ジュース、つまみの柿ピーを買い自宅で「カンパーイ!」。子どもたちが成人を迎え一緒にお酒を飲める日が待ちどおしくなった。

（広報編集委員　成田彰教）